

2 全道の実践事例

- (1) 北海道余市紅志高校
- (2) 北海道浦河高校
- (3) 北海道南茅部高校
- (4) 北海道上ノ国高校
- (5) 北海道羽幌高校
- (6) 北海道津別高校
- (7) 北海道白糠高校
- (8) 北海道中標津支援学校（高等部）

生徒の「ソムリエカ」を高める課題探究の学び

高校名 北海道余市紅志高等学校

市町村名 後志管内 余市町

活動名
ワインを通じた地域づくり



ワイン用のぶどう収穫（10月）

1 活動の概要

- 学校全体で育成を目指すキャリア教育で求められる資質・能力の象徴として「ソムリエカ」の育成を掲げ、教育課程の軸に据えている。

余市紅志高等学校で目指す横断的・総合的資質・能力の象徴、人間力の育成を通して身に付く力「相手に応じた対応・相手の立場、考え方の等の察知・多様性の理解、意欲、使命感」をソムリエカと名付けました。
(余市紅志高校ホームページより)

- 総合学科の特色を生かしたカリキュラムを編成し、3年間を通して研究活動を進めている。
- 1年次「産業社会と人間」人間関係の構築、職業への理解、資料整理方法の習得など、様々なトレーニングを行う。
- 2年次の「課題研究Ⅰ」1年次の学習を基本とし、「課題を解決していく力」「目標を実現する力」「自分に合う職業を選ぶ能力」を身に付けることを目的に自主的な活動を行っている。
- 3年次の「課題研究Ⅱ」2年次までに学習や身に付けたことをベースにして、生徒それぞれが研究テーマを決めて、1年間の研究を行い、研究発表会で学習成果と課題を地域に向けて（保護者、住民、町行政担当者等）発表している。

2 取組内容と効果

<主な取組内容>

- 「余市紅志高校をハブとする地域づくりコンソーシアム」の設置

余市町産フルーツのオリジナルレシピ開発

特産品のフルーツを使用したスイーツレシピを開発し、レシピ本を作成してショッピングセンターや道の駅で無料配布を実施

ワインの製造、販売

ワイナリー夢の森（余市町）が協力し、ブドウ栽培・醸造、ボトリング実習などを実践

商店街の活性化

余市町商工会議所と地域の商店街と連携し、スタンプラリーとショート動画作成を実施

- 札幌心療福祉専門学校主催の「農福連携コンソーシアム」へ参加

バリアフリー農園※1

高齢者総合福祉施設フルーツ・シャトーよいち（余市町）の協力のもと、出張型バリアフリー農園を提供し、その成果を集約・分析

障害者支援で行う農作業

余市養護学校の生徒の協力を得ながら、実用性のある農作業の手順マニュアル作りを実践

<取組の効果>

- 実践的な課題探究を通して、生徒たちが主体的に地域のことを考え、持続可能な地域づくりを実践できた。
- 地域への関心が高まり、町のイベントや行事等で地元の方と積極的に関わる生徒が増えた。
- コンソーシアムがあることにより次年度以降も継続的に課題探究に取り組める見通しがもてることでより計画的・継続的な課題研究が推進できる。
- 専門学校の高い専門性を地域課題解決に活かし、地域連携の強みとしている。
- 高校と支援学校の連携が今まで以上に強化された。
- 生徒のみならず、先生方や地域の方にもインクルーシブ教育の意識が芽生えた。

※1バリアフリー農園は障害の有無や年齢などに関わらず、誰でも農業体験ができるように工夫された農園のことです。

3 事業実施のプロセス

ここでは、余市紅志高校の「ワインの製造、販売」の1年目から現在（4年目）までのプロセスを紹介する

1年目
(2020年)

現校長赴任

「ソムリエカ」の育成を
枢軸としたキャリア教育

○カリキュラムの見直し
「国際理解」「生産ビジネス」「生活・福祉」

○協力団体の獲得
余市特産のブドウをつかったワインづくりを行うための協力者獲得

総合学科の強みをいかし、**特色ある教育課程**を実践するための見通しが立つ

2年目
(2021年)

◎学校全体のテーマ
安心して豊かに住み続けられる地域づくり

○課題探究の各テーマ決定
テーマのうち1つが余市特産のブドウをつかった
「ワインの製造、販売」

地域と連携した課題探究の学習にするために各関係機関、関係者で構成する
「**余市紅志高校をハブとする地域づくりコンソーシアム**」を設置する

3年目
(2022年)

○試作品の完成
生徒が生産するワイン用ブドウによるワイン醸造と販売につなげる試作品
商業科目との横断化によるワインラベル作成も実施

○余市町との連携
余市町が試作品200本を買い取る

○試作品の配布
「はたちを祝う会」で試作品を記念として配布

◎地域連携の強化
地域の飲食業者や豚肉生産者と連携し北島ブタを使ったメニューを開発し、コミュニティーカフェで
来客者に提供した

4年目
(2023年)

○ワインのさらなる活用
ふるさと納税返礼品につかってもらうなど高校生が
自らがワインの活用方法について考える

○販売実習の実施
名実ともにワインの町を自称できるよう、地域住民
に特産品であるワインに一層親しみを持ってもらおう

○完成品の配布
「はたちを祝う会」で新成人100名に完成品を記念として配布

ワインづくりを目的とするのではなく、自分たちのワインをどのように活用できる
のか、**生産した目的を生徒自身に考えさせること**を次年度のテーマに位置付ける



母枝誘引（4月）



ボトリング（8月）



ラベリング（12月）

4 推進体制

組織・機能	種	概要（人数・所属・謝金の出所等）
学校運営協議会	×	令和6年度の設置に向けて準備中
コンソーシアム	○	10名 余市町の行政職員、商工会議所、観光協会、養護学校、地元企業等で構成
コーディネーター	×	コーディネーターは置いていない
地域学校協働本部	×	町には本部があるが、高校との連携はない
地域連携担当教諭	○	農業科や福祉科をはじめ課題探究グループ担当教諭が担当
その他の連携先	×	なし
高校のデータ		<生徒数・教職員数> 生徒数：81名 教職員数：21名 <所在地> 〒046-0022 北海道余市郡余市町沢町6丁目1番地 <電話番号> TEL：0135-23-3191 FAX：0135-23-3192 <HPのURL> http://www.yoichikoshi.hokkaido-c.ed.jp/

生徒が地域課題を自分ごととして考え、行動する取組

高校名 北海道浦河高等学校

市町村名 日高管内 浦河町

活動名
総合的な探究の時間



地元企業と連携した体験起業（商品開発・販売）

1 活動の概要

- 1年次「産業社会と人間」内で探究学習に関する基礎を学び、2年次「総合的な探究の時間」では、SDGsをテーマに世界的な課題について探究学習を行う。3年次「総合的な探究の時間」において、地域をテーマに探究活動を実施している。
- 総合探究に限らず、外部講師や地域人材・資源の活用を積極的に行っている。
- 探究学習に関するコーディネートは専門分掌として、校内にキャリア・ガイダンス部が設置されている。全職員で推進する体制が整えられており、教材の開発・職員研修・地域連携等を一元的に管理・運営している。
- 例年12月に探究学習に関する「学習成果発表会」を実施している。学校関係者以外からの外部評価を得ることで、自分たちの活動の地域社会への影響を実感する機会となり、生徒達の地域への参画意識向上が見られる。

2 取組内容と効果

<主な取組内容>

- 教育活動の全体計画を策定・共有（3年間運用）
 - ・本校の目指す生徒像を整理し、生徒・教職員が、総合的な探究の時間を学びの総括地点とするための共通認識を図った。
 - ・探究学習の手法及び指導方法について、各教科・科目でも活用するためのマニュアルを整備した。
 - ・キャリア・ガイダンス部が、探究学習に関する専門分掌として、生徒・職員をフォローアップした。
- 高校生の活動に対する評価
 - ・学習成果発表会（開発商品販売等）
 - ・町内、道外での開発ツール（地域課題検討ツール）ワークショップの実施
 - ・浦河町理事者（町長・副町長等の役場幹部）報告会の実施
- 高校生と地域連携（外部連携）
 - ・総合的な探究の時間内で、インタビュー調査やフィールドワークを実施することで、校外の方との関わりの増加

<取組の効果>

- 生徒・教職員ともに「何を学び、何を指導するのか」について共通認識を持つことで、探究学習の意義について理解を深め意欲を高めることが出来た。
- 各教科・科目で探究的な授業が展開されることで探究の手法について生徒が習熟し、課題発見能力が向上した。
- 地域連携や地域人材の紹介を校内組織で一元的に行うことで、地域連携の属人化を防いでいる。
- 校外の方に対する研究のプレゼンテーションや開発商品の販売を行うことで、本校の取組について理解いただけた。
- 開発ツールの製品化を町役場から提案されるなど、活動に対する評価を地域から得たことで、自己有用感を得た。
- 自分達の活動（学び）が、地域社会に影響を与えることを再認識し、郷土愛が醸成された。
- 地域に対する理解が深まり、将来的な地域課題解決に向けて進学先を決定したり、地元での就労希望者も増加した。

3 事業実施のプロセス

実施のきっかけ	<ul style="list-style-type: none"> ■キャリア教育全体計画を策定し、生徒・教職員ともに、「地域連携」（地域資源・人材の活用）及び地域社会に「有為な人材の育成」の観点が共有され、担当分掌による指導計画案の立案・運営がされている。
活動実施から活性化の手順	<p>2022 年度</p> <ul style="list-style-type: none"> ■キャリア教育全体計画策定（3 年次） <ul style="list-style-type: none"> ⇒地域素材・人材の活用（世界に誇る北海道人の育成を目指す） ⇒地域に開かれた教育課程の編成 ⇒地域課題に資する資質・能力の向上を明記 ■浦河町役場及び浦河町観光協会との連携 <ul style="list-style-type: none"> ⇒ふるさとワーキングホリデー参加者による助言・指導の実施（「余所者」の視点から、地域振興について学びを深めた） <p>2023 年度</p> <ul style="list-style-type: none"> ■総合的な探究の時間（3 年次） <ul style="list-style-type: none"> ⇒地域をテーマとした探究学習の実施 【地域の事業承継班】（持続可能な地域社会とは） <ul style="list-style-type: none"> ⇒浦河商工会議所、日高振興局、中小企業診断士、I ターン・U ターン創業者等と連携 ⇒体験起業の実施（商品開発） 【地域課題検討ツールの開発班】 <ul style="list-style-type: none"> ⇒浦河町役場、浦河町観光協会、大阪大学、尼崎ユース交流センター、岩手県久慈市役所、福岡県立小倉南高等学校等と連携 ⇒地域課題検討ツールの開発（各所でのワークショップの実施） ■地域課題に関する広域連携（道外）により、地学協働の在り方に関する見識が深まった。 ■地域課題を自分ごととして捉え、主体的に学習に取り組む生徒の増加 ■地域住民からの講演・ワークショップの依頼など学校評価の向上



U ターン創業者への起業に関するインタビュー調査



地域課題検討ツールを使用した地域住民とのワークショップ



地域住民と連携した催事（地元祭典）企画運営

4 推進体制

組織・機能	有無	概要（人数・所属・謝金の出所等）
学校運営協議会	×	
コンソーシアム	×	
コーディネーター	×	
地域学校協働本部	×	
地域連携担当教諭	○	キャリア・ガイダンス部職員（9名）
その他の連携先	○	浦河町役場、浦河町観光協会、浦河町商工会議所、日高振興局等 他多数
高校のデータ		<生徒数・教職員数> 生徒数 274 名（1 年次から 101、85、88） 教職員数 33 名 <所在地> 北海道浦河郡浦河町東町かしわ 1-5-1 <電話番号> 0146-22-3041 <HP の URL> http://www.urakawa.hokkaido-c.ed.jp/

「縄文文化」の継承と活用へ向けて（官民学が連携した地域課題解決の取組）

高校名 北海道南茅部高等学校

市町村名 渡島管内 函館市

活動名
渡島フロンティア人材育成事業



青森遠征（小牧野遺跡見学）

1 活動の概要

- 世界遺産である「縄文文化」の継承・活用を地域課題とし、探究的な学びを継続的に深め、ふるさとへの愛着を育むとともに、未来の社会を生き抜く資質・能力を身に付けた人材の育成を図る。
- 1年次は、地元（南茅部）を中心に縄文文化・遺跡の基礎を学び、2年次は、地域と道内外の縄文構成遺産がある場所に行き、比較・検討をした。3年次に当たる次年度は、縄文文化・遺跡の「継承」と「活用」をコンセプトに「発信する」を重点に置き、活動する。

2 取組内容と効果

<主な取組内容>

■ 渡島教育局職員が中心となり、協力校と外部協力者の連携を推進

- ・「地元の資源」をテーマとすることで、身近な地域課題への関わりを持たせた。
- ・教育局の社会教育主事が外部団体や企業・大学等と連携が推進されるよう、サポートをした。

■ 地域課題を解決するための協働体制とその活動

- ・探究活動を通して、地元で縄文遺跡の保存を考えている団体や縄文を活用して地域活性化を行う外部団体と交流する機会が出てきた。
- ・地域の縄文関連施設と連携したことで、縄文文化の魅力を感じ、価値について学ぶ活動を推進した。
- ・振興局と連携し、道内外の縄文関連施設見学や高校と取組交流を実現させた。

■ 南茅部高校が中心となり、南茅部小・中学校と連携

- ・校種間における系統立てた縄文学習の教育課程について協議・検討する場を設けた。
- ・南茅部地区の小中高の児童生徒が意見交流し、校種を越えて縄文文化の継承に係る課題について協議した。

<取組の効果>

- 令和3年に「北海道・北東北の縄文遺跡群」が世界遺産に登録され、縄文を通して地域を盛り上げる団体の活動に、参画する生徒が増えた。
- 教育局がつなぎ役となり、高校が目指す取組を説明し、外部団体や企業・大学等と調整を進めたことで、探究活動を推進できた。
- 縄文遺跡の保存団体と交流する機会が増えたことで「世界遺産がある地域」の価値や可能性について、気が付く生徒が増えてきた。
- 振興局との連携により、道内外の縄文関連施設見学や青森県の高校生と交流することができたことで、地元の縄文文化・遺跡のPRの仕方について、自分たちで積極的に考えるようになってきた。
- 校種間における縄文学習の「方向性」や「活動」について確認し、再設定したことで、目的が明確になり、児童生徒の実態に合った内容で学習を進めることができるようになった。
- 高校生が中心となり、小中高の意見交流会を開いたことで、参加した児童生徒の主体性が上昇した。

3 事業実施のプロセス

実施のきっかけ	<ul style="list-style-type: none"> 令和3年に「北海道・北東北の縄文遺跡群」が世界遺産に選出されたことを機に、小中高で「縄文文化の継承・活用」を地域の共通課題として捉え、本事業が始まった。
活動実施から活性化の手順	<p>-----初年度-----</p> <ul style="list-style-type: none"> 部活動「縄文クラブ」の人数が増加。 推進協議会で、事業の方向性や年間計画及び協力体制を確認。 小中高一部の児童生徒を集め、実践交流会にて、各校種における取組状況を発表。 縄文遺跡保存団体やサポート企業等と「縄文遺跡の活用方法」や「地域の活性化」について意見交換会を実施。 はこだて縄文まつりの運営協力。 <p>-----2年目-----</p> <ul style="list-style-type: none"> 振興局の協力で、渡島管内3市町（北斗市・七飯町・森町）の歴史資料館等の視察及び、青森県の道の駅で南茅部地区の縄文遺跡・文化を広めるPR活動を実施。 北海道教育大学准教授の助言を受け、小中高の管理職及び教諭と、校種間における系統立てた縄文学習の教育課程について協議・検討。 校種間における縄文学習の教育課程の目的を整理・共有した。 事業を進めることで、教職員の意識が向上し、若手教員と教育局職員で「総合的な探究の時間」の充実に向けて意見交換会を実施。 一部の生徒と青森県の高校生とで、地域の縄文遺跡の活性化について取組交流会を実施。 はこだて縄文まつりで、AR体験ブースの企画・運営を担当。 ※感染症による学年閉鎖のため、当日不参加 AR体験の利用促進について縄文文化交流センター職員と検討。



R4年度 小・中・高 実践交流会



R5年度 青森県の道の駅 縄文PR活動



R5年度 青森南高等学校と世界遺産に係る交流

4 推進体制

組織・機能	有無	概要（人数・所属・謝金の出所等）
学校運営協議会	○	15人、函館市南茅部支所長、PTA会長、南茅部小・中学校長、北海道大学教授 南茅部高校を守る会長、縄文文化交流センター館長 等
コンソーシアム	×	
コーディネーター	×	
地域学校協働本部	×	
地域連携担当教諭	×	※現在は、教頭が担当
その他の連携先	○	渡島総合振興局（環境生活課）、函館市南茅部支所、縄文 DOHNAN プロジェクト
高校のデータ		<生徒数・教職員数> 生徒数：26人 教職員数：12人 （令和6年1月1日現在） <所在地> 北海道函館市川汲町1560番地 <電話番号> 0138-25-3372 <HPのURL> http://www.minamikayabe.hokkaido-c.ed.jp